テレカコレクション

〈第25回　ラジオ編〉　　健

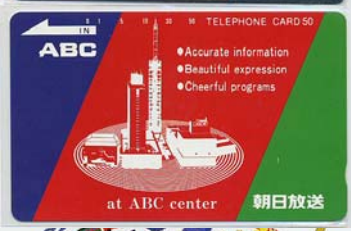
ラジオ放送は大正１４年（1925）３月に東京・愛宕山で始まったそうで今年はラジオ放送８０周年の年に当たるとのことだ。ＮＨＫではこれを記念したＴＶ番組が数日続きで放送されている。中村メイコなども出演しており、当時の放送内容や裏話などもしていた。中村メイコは当時から七色の声を持つといわれていたが一人で娘・母親・先生・友人など一人何役もの声色でドラマを再現してみせた。声だけ聞いている分には同一人物の声とは全然思わない。人が遠ざかる時は声を少しずつ落とすなどラジオならではの話し方なども紹介していた。

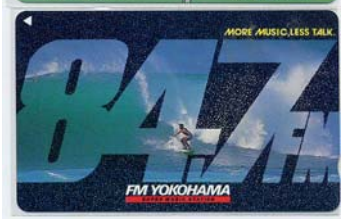
さてラジオについて書くとなると最近はＴＶ一辺等でたまにしか聞くことがないのでラジオに関する記憶を辿ってみる。

子供の頃、ラジオはいつも高いところにあり自らダイヤルを合わせることは無かったように思う（起きるときにはすでについていた）。と、ここまで書いて思い出したが子供部屋の押し入れの上段にもラジオがあった。こちらはかなり大きいタイプで上部の蓋をあけるとＳＰ盤のレコードプレーヤーになっていた。触るなと言われていたような気もするが、両親は仕事で帰りが遅かったので姉たちと勝手にいじってレコードを聞いていた。ラジオ番組はそれほど多くなく時計替りのように同じ番組を聞いていたような気がする。特に小学校へあがりかけの頃は「おいそが氏とおやかま氏」の騒々しい始まりの音楽で朝食を取り学校へでかけるのが日課だった。子供向けの番組は夕方の時間くらいまでのためそれほど聞くこともなくむしろ貸し本屋の本ばかり読んでいた。「赤胴鈴之介」「少年探偵団」「マッハＧＯ！ＧＯ！ＧＯ！」など人気漫画の番組もあったが何か物足りない思いをしたものだ。

　そんな中で好きでもない番組の題名がいくつか頭に残っている。「朝丘雪路の日記帳」。「ある日私は」「孫悟空西へ行く」などはテーマ曲のメロディも頭にこびりついている。ラジオを聞くようになったのは中学生になったころからだろうか、友達とＧＳ（グループ・サウンズ）やスターの話題が多くなったせいか、自分専用のラジオを買ってきて音楽番組を聞くようになった。本当のところ音楽は苦手であまり関心はなかったが話についていけないので聞いていたような気もするが、それなりには楽しんでいたようだ。覚えているのは日曜の朝の番組でロイ・ジェームスの「不二家歌謡ベストテン」、続いて「日曜はダメよ」のリズムに乗って歌謡曲とポップスの「グリコ・リクエスト合戦」？を、ふとんの中で聞いていた。この頃は休みになると朝飯も食べずいつまでもふとんに潜っていたなあと思う。番組の思い出であるがロイ・ジェームスは外国人ながら日本人より流麗な話し方で番組の途中に「ロイ・ジェームスの歌謡メモとまいりましょう」の決めゼリフで芸能界や曲の辛口批評をしていた。

　「グリコ・リクエスト合戦」の方は他の番組と記憶が混じっているのか怪しいところもある。司会は「くず哲也」でリスナーの失敗談を紹介する番組。んっ。リクエスト合戦は？やっぱり記憶が混じっているのか？このあたり記憶の断片を記すと確か二人のゲスト（だいたい男女）が歌謡曲とポップスに別れそれぞれ曲をリクエストし、クイズに正解したほうの曲がかかるという内容だった。ご愛嬌としては時々一方のゲストの歌が、相手側のリクエスト曲になりクイズに正解したため自分の曲がかからないということもあった。番組の途中、水前寺清子が「ダメでもともと！ダメでもともとじゃないですか！」という絶叫が時おり入るのも印象的だった。（やっぱり二つの番組が混じっているようなので正解を知っていたら掲示板にご一報を、考えてみたらＤＯＫＵＧＡＫＵではラジオものの企画はやってなかったかも。）



「日曜はダメよ」のテーマ曲は、もともとは映画のテーマ曲であることは知っていたがこの番組の演奏はベンチャーズだったのは大分後で知ったことだ。

ところで、ホリエモンがニッポン放送を買収するということで連日話題になっているが放送開始８０周年の年というのも巡りあわせか。ラジオの魅力というのは何かをしながら聴けるということと、双方向性の強い媒体ということだろうか。深夜、受験勉強や徹夜仕事をしながら聴いたラジオ、タクシーの運転手や主婦なども仕事をしながら聴けるというのはラジオならではで、語りかけるような口調、テンポの良い掛け合いなど決めゼリフも多く飽きさせない。リスナーからの投稿で成り立っている番組が多いのもラジオの特徴であり投稿者の体験談や思い出に共感し、自然番組それぞれにリスナーとの一体感というものが築かれている。ネットと融合しても手段がかわるだけでこのあたりホリエモンもリスナーを無視するわけにはいかないだろう。深夜番組の傾向としてはオールナイトニッポンに代表される若者向けのものとじっくり聴かせる中高年向けの「ラジオ深夜便」がある。音楽をじっくり聴きたい向きにはＦＭ放送がありこちらは通常のラジオとはまた違った趣があり、ＦＭ専門の雑誌もいくつか発行されている。